



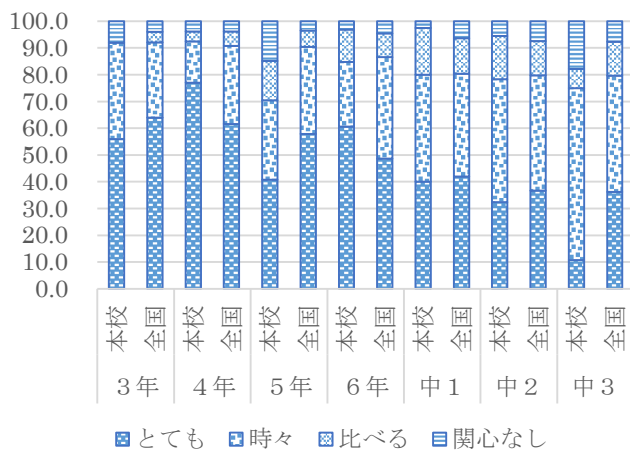
親のほめ力、大人のほめ力

～ もっとほめよう！！日南の大人～

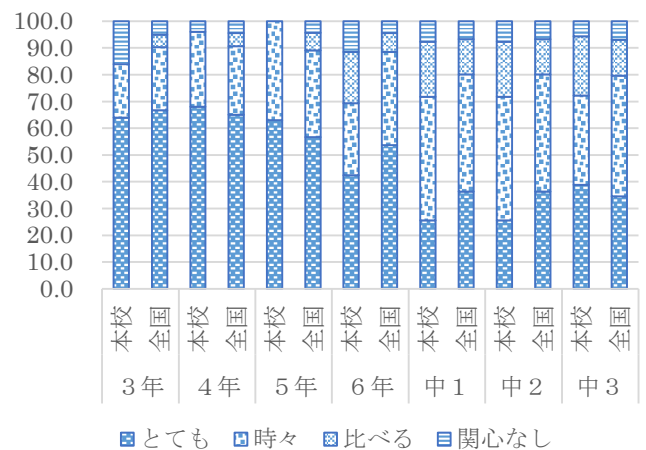


日南小学校・日南中学校の児童生徒を対象にした「標準学力調査のアンケート」の中に『愛されていますか・家族のささえ』という項目があります。その最初に「家の人は、あなたが努力してがんばったとき、それをほめてくれますか、認めてくれますか。」という質問があります。下記のグラフはその答えをグラフに表したものです。

親のほめ力（25年度）



親のほめ力（26年度）



全国と大きく変わっているのは、小学校高学年ぐらいから「とてもほめられている」と思っている子どもが少なくなっていることです。全国平均より10%～25%程度低い数値です。しかし、時々ほめられる数値がその分高くなっています。また、他の人（兄弟姉妹・同級生など）と比べておられる傾向にあります。

日本人はほめることが非常に苦手であるといわれますが、ここ日南町ではそれ以上にほめ下手であることが以前からいわれていました。多くの親が誤解しているのが、「ほめて育てる」という意味を、ダメなところまでも良いと言ってほめなければならないのかと勘違いしていることです。

では、わが子の心に響くようにほめるには一体どうすればいいのでしょうか？ それは、「無理にほめるのではなく、ただ行動を振り返り、気づいたことを伝える」ことがよいのです。つまり、子どもをよく観察して、行為を価値づけてやることです。「宿題、やってるね」「仲よく遊んでるな～」「もう準備やったんだ」と、見たこと、気づいたことをこまめに伝えることがよいのです。

子どもがした行為を指摘する方が、子どもにより影響をもたらします。自分のした行為をほめられることで、その行為の当事者である自分に対して肯定的なイメージをもつことができるからです。乳幼児からもっともっとほめて育てませんか。

子どもにかかわっている友だちや先生、地域の方々の「ほめ力」も全国平均を下回っています。日南町の大人のみなさん、もっともっとほめて、子どもたちに自信を持たせましょう。

【裏面あり】

「ほめ方ステップアップ講座」

ステップ1：その場ですぐほめること

ほめるタイミングが重要です。後でほめられても覚えていませんし、心に響きません。ほめることが見つかったら、その場ですぐにほめましょう。

ステップ2：結果よりもプロセス（過程）をほめること

努力をほめられた子どもは、結果がどうであろうとおそれずにやってみようと思うようになります。新しいことを始めて挑戦する時は、いつもにも増してほめてあげるといいでしょう。結果よりもプロセスが大事です。

ステップ3：具体的にほめること（行為を価値づけてあげること）

具体的にほめてもらった方が喜びも増します。たとえば、「いい子だね」よりも、「お手伝いしてくれて助かるな。」「おもちゃのかたづけがよくできたね。」と具体的にどんなところがよいのかをほめてもらった方がうれしさは倍増します。

ステップ4：先にほめること

うまくできなかったことをとやかく言う前に、先に良かったところをほめましょう。「今日の〇〇できてよかったよ！練習一生懸命やったもんね。ちょっと間違ったところは後で見直そうね。つぎはきっともっともっと上手に弾けるよ。」ほめながらも次もがんばろうねと励ますことでやる気になります。

ステップ5：スキンシップでほめること

頭をなでたり、抱っこしてあげたりすると、よりうれしい気持ちになります。

ステップ6：しっかり目を見てほめること

片手間でほめないで、きちんと目を見て、しっかりほめることが大事です。

ステップ7：「ありがとう」「助かった」は最高のほめ言葉

「あなたが〇〇してくれて助かった！！」「〇〇してくれてありがとう！！」などは、やる気が出る言葉です。

ステップ8：他人がほめていたことを（ほめているように）伝えること

「〇〇さん（先生）が△△していることをほめておられたよ。」など、他人に成り代わって伝えることは、よりやる気のでるものです。

（参照：宮野茉莉子氏「ほめ方の極意」）



「親は子どもの応援団長」
「大人は子どもの応援団」

